



編輯長尾吉之助

西南阿曾白浪

三島信

10

15

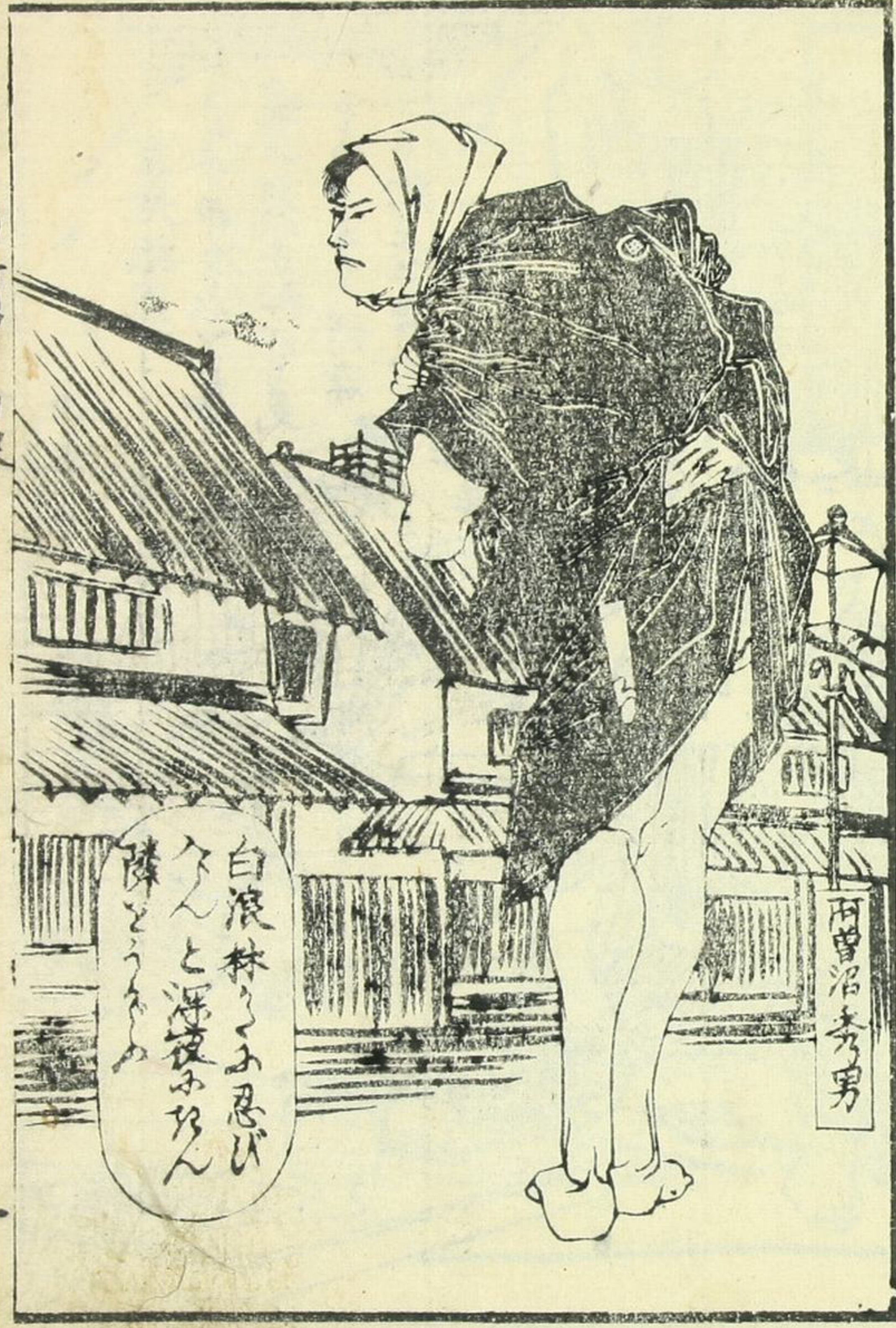
20

25

30



48-8087



西曾沼秀男

白浪林こゝ忍び  
 夕人と海夜ふらん  
 隣どうらん

西南にあり乃白波序  
 其の子孫を中一冊の文海に名を石川濱  
 此の書術いふるもも過る白の新来の新書  
 價を以て名なる究職の島條炭の大金を  
 奪ひし事傳の長細紙柄ハ西系特印十年  
 六つたある身四有世二寄りて因七有りて四有  
 其を羅まで編む候だる長物何れを再び格に  
 細網海子四男の徳一の境におおしを購あらんを  
 事ふよられと

明治十一年七月某の馬鹿  
 同日出版  
 石川都賀重吉



京地祇園町  
さきゆきふと穿手  
遠ふ藤子松江と見  
そあより訓添  
の釣足と名

中谷半七

阿曾沼秀男

松栄

阿曾沼秀男

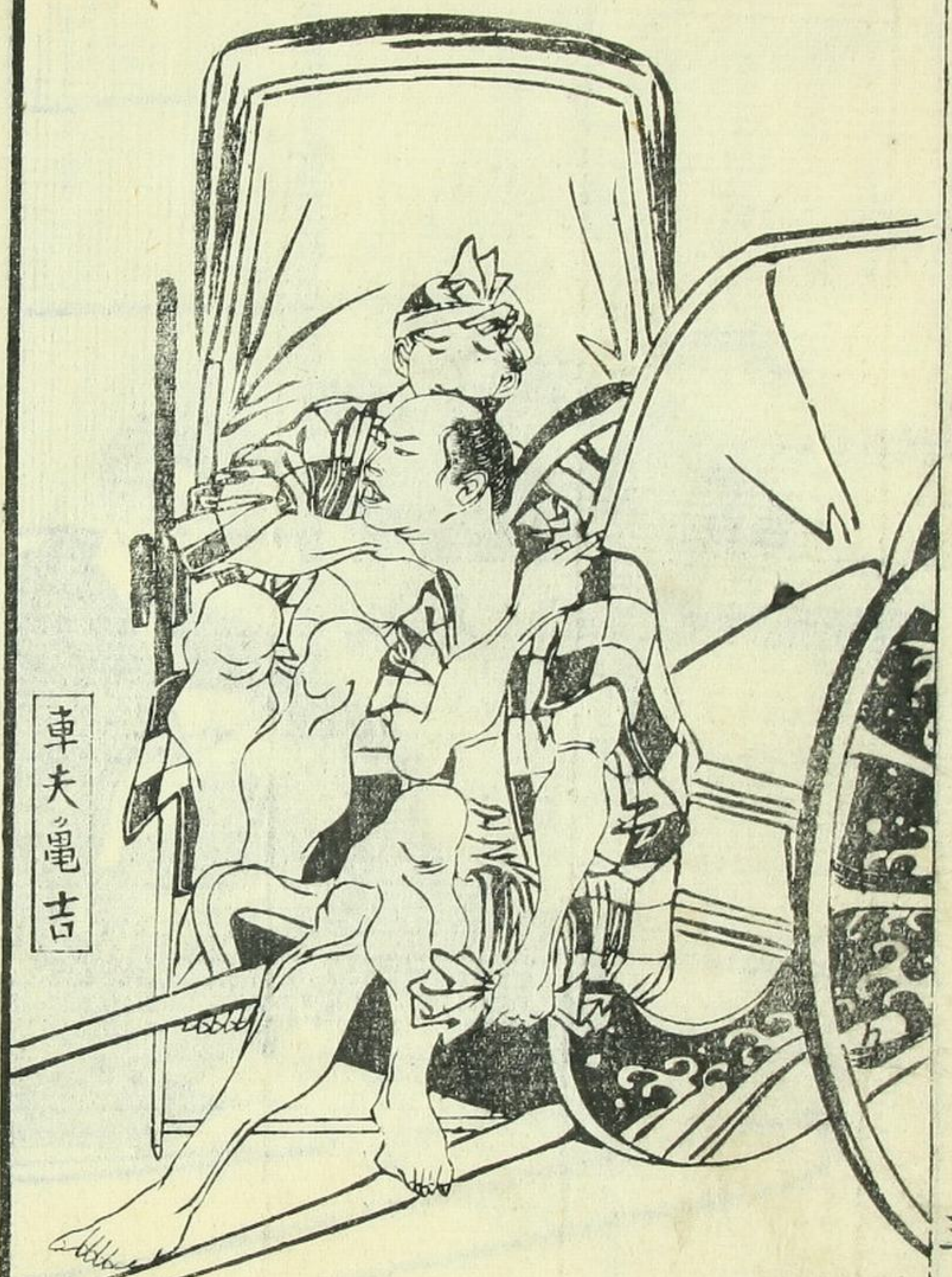


巡查兩  
 名車夫  
 七松  
 島あり小野方  
 小賊  
 縛小向山

長謙吉君



車夫亀吉



西南阿曾の白浪

中庸に言はずや。莫見乎隱と善惡俱以之と顯をすの赫々  
 然たる天鏡の面ふ輝らす暁朝に開らく蓮花の泥より  
 出て泥に深祓を其名さく世に薫まるとに引きて清白貴  
 重の人躰に生を得あがりら泥坊と汚名と流すの竹木  
 ふも芳り一譚の一條の泥に縁ある名詮自性其名も  
 阿曾沼秀男とて白浪立る周防の海縁りの林り山口縣  
 舊の士族の家に育てど慾と惡事の二本指父兄の教  
 諭の薄ささみや厚き朝恩も不顧同藩中村備三た  
 る者と心を合せて明治七年二月の頃小肥前なる佐賀  
 の暴徒江藤新平の逆意に組し心多くも官なる文



書に詐偽となり。官印を擅に捺し上彼の中村の手に  
渡り兇謀日々に累積せんと。薄きハ賊の手策にて。  
天軍一度降るや否やさしも名を得し江藤新平も佐  
賀に露命と遠近や。夢も通ぬ里迄も悪しき名  
残し華に迄汚きの墨や含むあるべし。再説阿曾  
沼秀男も俱に道まぬ天の網長き芋繩に面縛れて  
緩しむやぬ糾問に。どまり首尾よく言解んと。智恵  
と布婁那の辨舌も。あんど天威と欺き得ん。忽ち爰  
に屈伏なし。悪事不残白状に容易かろう。る罪人  
せんと。竟仁大度の天憐に。漸く士族を除く。て放

免をりしうべ親族なる同苗采造方に藉と寄せつ。年  
月とおもはば暮らるを五ヶ年間。薫る心に一物ありや。本年  
五月七日の項本國周防と出立なし。思案漂々。楫枕蒸気  
の船に便を得て。芦の芽立や津の國や。千早振ふる。ふ神戶  
なる。港に出た。の着に。是。同月の八日。ふ。て。其夜ハ其  
處に一泊なし。翌九日朝ま。た。大阪。して。登らん。おれ  
と。流車に乗りつ。片邊と見え。ハ位有。猛。人。品。骨。柄。従  
者と思。二。人。と。召。連れ。威。風。四。方。に。薫。う。た。る。い。如。何。成  
人。と。あ。く。見。ま。た。是。あ。ん。雲。霧。晴。ま。ぬ。世。に。ハ。薩。日。隅。三。州  
に。琉。球。迄。も。幕。下。属。せ。七。拾。有。余。万。石。の。大。守。なる。薩。戸



の國鹿兒島の城主ふして。当今ハ華族島津忠義君ふてを在  
しける。以時秀男思ふよう。彼等の名たる。金満大彦定て旅  
金も充滿あふん。是とどふと工夫して我物ふこそするなり。は  
兼ての念願成就せんと。又りや狂意の駒心の猿手長猿  
あしき思案の猿智恵も。未の木くも落ると知る。は。風  
と凝らも胸の火の煙りに運ぶ車より心へ急に石炭の匂ひ  
ふあ。で名に負ふ。浪花の里の梅田なる。駐車場におと  
著にりり。斯く阿曾沼秀男ハ島津君の後方より。止宿  
ハ何所と窺ひに。其夜ハ大阪北堀江三番丁林常吉方あて有  
りまを秀男ハとしらぬ顔ふて其家に一泊頼こつんと再

三辞退まれ詮方をく。其夜ハ松島花街なる。席僧業の  
清水ふ祿方にて。一時の愉快時とつし。午前の四時おろ  
其家と立出。兼て見認りの三番丁。自己ぐ心の縁りを  
る。林と記す標札に。爰なんゆりて心でうとふと。何処で  
手廻す階子と以て二階とじて忍び入る。往昔ハ逆茂  
木鉄の城門外丸本丸ハ門各甲宿直の護衛や不寐の  
番十重に二十重に圍繞まれて。嚴重なりし城主なるも。  
今ハ薄戸の旅泊の寐殿時と笑顔の秀男ハあひか  
俣に忍び入とぞ。主従俱の寐入り鼻。何白川の夜と  
あ。ととるとあ。に搔い集め。其中にある。胴乱二個

阿曾の白皮

ハ從者の迫水伊之丞と。龍聞藤右衛門兩人が。忠吉君  
より預りたる。大切の品物。中には。五円十円取交措  
幣。合せて其數五千円。まゝ二個に。八百余円。其はり  
腰提げ手扱。糸帛入。心の終に奪ひ取り仕合せ。し  
野の花ざり。頭て散ぬる命といふ。ぬ白波尻に枕  
とうけて。何処へう逃げ去りたり。  
百敷や。大宮人の日間毎に。うさす。櫻の七重八重。げん  
九重の都府。とて。四條五條の橋の上。老若男女貴賤  
都鄙。色めさうさる。形勢へ。東方西方南方北方。むじもいま  
も河原より。東に当る。祇園町の。花のさやうを。やかに。

並べし軒の其中に。下京十五區祇園町。南側みて。席賃業  
中谷羊七と。旅宿屋あり。本年五月九日の事なる。う  
主齡ハ廿五六。相應。衣服に人品も。賤しうさる。出立に。  
誰が眼に見ても。官員。武家の古手と思し。さう。飄々  
然と入り来り。一泊の程。依頼入ると。言葉。ぬあ。言ひ入る。  
ハ是。あん。大坂。北堀江。三番丁。林常吉方。い。あて。島津君  
の大金と。奪ひ取りし。兇賊。あて。向。曾。沼。秀。男。か。う。七。と。い。  
神々。ぬ。身の中。谷羊七。怪敷。姿。も。さ。これ。の。兼。て。の。業。体  
否。應。心。し。何。処。々。来。さ。う。知。ら。ね。ど。も。あ。早。あ。さ。の。挨拶  
に。お。茶。よ。煙。艸。よ。ま。づ。坐。敷。へ。と。一。人。の。客。も。業。体。に。これ。ハ

何曾沼白皮

頂つぐふ福うの神う打う出での小つ提らり提では庭は履は足あ駄しも粗ろ末  
いせぬ如し才ま丹ま後るのおお升ままでで量たりと心こ程ら弁べ茶ち良らるる客  
の世間よとらくととと袋ふ鍵ぎのの子このあるる曲く者さとの後のみみぞおめめひ  
知ちらしとらり。聖ままば十日じ十じ日じ早さ十五ご日じの事事さなるるが。秀男  
の家え主しと招らる僕わへ西國こ邊への士族しちらるる。当あ地ち繁は花はの支  
えれへ高法は開あ業ぎのため。家祿り奉く還か金き所し持ぢななして上  
京きへたじとれど土と地ち不ふ案あん内ない且かつの事事さなるるが。獨身みの事事さなるるが。宜  
敷し貴き所しと頼らると入らると聞取きる。戸主しへ気轉てん者し一い亦またつて知ちる。塞  
塞さい翁うが。萬事まへ僕みか委あ任にんとらる。香々さとむふふの場の場の  
呼こ吸ま流り石い蛇じの道道みちへいく。ハいくく。暫時じするらち席せき上

いの海うとなく山となく。佳香き珍ち味みや百味まいの飲食しハイと持て  
来きらるか。鈿子てんの六菩ぼ薩さつの汁汁じゆの醜醜しゆ水すい飲のみ。愁ひの玉ぎ帚しゆと玉  
と揃へし歌う舞まの曲曲きよく加か陵りやう頻ひん迦がの藝妓ぎの聲聲こゑ音ね有あ頂てん天てんなるる  
快くわい樂らくへ是浮う雲うんの喜見けん城じやう面めん白はくやあららやと情じやう薄はく女にょの  
舞まの袖袖そで昼ひるり夜とも神かみ佛ぶつ混ま淆ぎやう乱らんる。世界かいへ杯盃たい盤ばん散さん精しやう打  
々々来きらるらる一い人にんの舞舞ま姫ひめ年ねんハ十七しち初はつ花はなの雨雨あめに去らるらると。姿  
姿すがたと是とん同どう所しよとん町ちやうとて三さん上じやう弥み助すけ方かたの出出で稼かせめて  
化け名なハ松栄えい本ほん名なハ中西しやうのあつひとて今いま賣う出でしの全ぜん盛せい  
瑞ずい璃りの鬢鬢むすぶつる珊さん瑚この揃揃そろ。それに準しゆんせし綾あや縮ちゆう細さい帯たいるる袖そで  
るる善ぜん尽じんし美と尽せし六ろく都との名物めいぶつ着き飾かざりる。羽根ねもかも

河曾の白皮

五

川に晒し上たる羽二重地顔へ瓜實月の眉歩行むさうこの  
娉姑らへ春の柳糸櫻に風の誘うに殊なきす。夫乃男が  
側に吹き送る。沈麝の香氣ほのめとて。紋切紙の挨拶も。  
妙ハニ難有と旦那ハと。囀る轂音ハ微り妙。丹花彩る  
唇ハ雪間ふ笑める寒紅梅。鈴張る流し眼あつとりと。秀  
男が顔ハ打ち賦とハ。秋氏も孔子もたまらまのに。まのそ  
況んや凡夫なる秀男が身ハあひてあや。天威ハ背く強  
賊も心の外の曲者ハ。現の如く魂棄たれ流し延ハ。夏の  
日の長さも是ハ。あハ劣るべし。まや酌む酒も長醉ハ。時分ハ  
ほど見てとる。お茶亭とれと合図の眼の采配ふ。刀利天

上の中二階かたる世界ハ地球上。あうりと轉ぶハ秀男と松栄  
線香數二百(金五十円)の定約ありて。天にあらハ比翅の鳥。地に  
あらハ連理の枝と。揚貴妃かどこの私語雲と雨との巫山の  
夢ハ六の二人より。知る者なし。かくて阿曾浴秀男ハ彼の松  
栄と寵愛し。隔日ハ是と招き。娛樂とある而已ならず。ど  
金側時計や或ハ。金と鎖りと其代價。百止円ありて四條  
中島の時計屋みて買求め。又ハ寺町四條下る唐物商法  
中村の由兵卫方みて。洋製の金入函と其代料。三十二円に  
買ひ求め。其外カバン蝙蝠傘。ケットウ風枕。あるひハ。まこ  
四條御旅町時計師。森田勇二郎方みて。眼摸し時計と

十六円めて買ひ取しと周防たる官市とろの洋物商小倉  
屋某(賣却)し。宇治の葉屋で初嘗と号し茶と(十六円  
十六円めて買求め。防州三田尻の廻船問屋。拍木仁兵衛  
へ書面めて賣却と依頼をし。五月廿二日西京たる中谷半  
七方(立飯)り戸全に向ひ僕へ一度び歸國たし。遠からず  
上京すべしと。暇をして出立りし。同月廿九日ま中谷  
へ立歸り。其夜半七に言々る。彼の舞姫の松葉事  
何率手切とみ致しと。宜敷頼むの一言に線香敷と二十五  
(十二円五十錢)めて雪霜いとぬ松葉も。吹ら来る客の秋  
風。一旦嘯しハ切とみなり。秀男ハ夫より島石カク薄雲

太夫に通ひ諾め夜毎日毎の愉快も彼の耶那の夢なうて。  
ぬと手て粟の大金に如何なる驕奢も程々の汲めども及ぬ  
囊中の五千八百十九円のためとぞ知られり。斯て商  
曾沼秀男も。心の中お思ふ座して食へ山も空しと家と  
求めて商法にからんものと六月上旬ま羊七はうち向ひ  
貴身も定めて賢察めん。大金所持せず我身の上世ま  
居も不安心何率一入尽力して家と求めて玉ちんちと余美  
なと依頼みウシと吞込と。下京十三区寺町通り四條下ル  
貞安前ノ丁東側子程才五百九十五番地の内。才一番と借受  
六月九日に送籍も整ひ小間物と開業せし。多分の金と

河曾の白皮

所持するもの。取違司り勸業場へ預けんのと羊七は示  
談うれば是れ且那。五炊菓との申しをうら。茲ふ一段の五相談  
あり。私の宅の西隣り。軒と連ねし十九軒の江刺水口山村  
何某の所有をれど。此頃賣却仕度の爲躰幸い貴身が  
買ひ玉へ。毎月上る家賃多し。立活計の立つらん。悉  
皆僕が引受申し。必らず利益の功と奏せんと。聞て秀男  
へと屈早。宜敷依頼の一言に忽ち持主へ示談をせ。金二  
千五百円まで取極め。同月十九日懐切方端相済がと。何分  
艱身の秀男をよ。相成る妻と娶とと。良縁が待  
折しも。貞安前に煙管商法奥田源右エ門の妻の妹。親

元へ上京は五区鍵屋町にて。大西勝七の妹。うら。連羊の十七色  
盛り。大がう。愛の梨花海棠雨と帯なる。瓜情。打々奥  
田へ来りぬると。秀男の通間見得て。忽ちあつて。煩悩の  
せめまつて羊七に。かくと。うら。心はうら。秀男且那の事  
なれ。後ふ。悪く。報う。思。ウ。吞。且那。あ。の  
位。ひ。の。別。嬪。へ。女。名。所。の。西。京。ゆ。ま。ま。こ。二。入。の。外。ま。の。鍵  
針。糸。竹。讀。と。書。算。用。香。花。茶。の。湯。万。枝。に。通。し。才。気。質  
が。実。直。に。親。兄。才。に。孝。行。を。り。万。事。揃。ひ。し。評。判。娘。兼。て  
僕。も。且。那。さん。に。か。勸。め。り。ふ。と。思。ひ。し。折。先。馳。仕。ら。と。是  
の。閉。口。色。ふ。も。ぬ。く。ぬ。且。那。様。と。笑。ひ。交。り。に。か。髭。の。莖。べ。ん。ち。

可憐な白皮

ら九分の媒人口。何の免もめと談しと見ませうと。半七(奥田)へ行と。斯と語と。源右門も。女房の里の大西へ逐二に言ひあめ。大西もあふなきと良縁と。ボコと千ぐらと。善(急)の諺に。六月廿四日の夜。御池通り富の小路。松清とある。割烹店にて。三三九度の盃。早任の江に著る。何思ひけん。源右門へ秀男に向ひ言ひる。斯祝言も済とれと。今更て頼と。あらと離縁し玉とる。と數々。突き出す一言。只忪然と秀男も。暫時言葉もをりじ。自己の胸も一物の蚊の穴より。蚊の崩れ。根問ひ葉問ひ。思しうをんと。奥田に向ひ訊ひ。ねと。貴意に仕と。然るべく

お執計らひ玉とるべしと。言葉安々の返答に。然と。五美知忪けなしと。あらと。伴なひ立飯。短く。縁。短う夜の。酒宴に。曉む東雲より。白む。思ふ。此場の仕宜。一夜。千夜と。あぐと。なる。鴛鴦の契りも中絶て。阿積の沼に。あぐ。本意失ふ。阿曾沼の胸に。悔し。山鳥の尾上。隔る。比翼の床。一人。さぐく立飯。即ち。五日。中谷。半七。方より。あぐ。只今。あぐ。の。五。人。来。と。使。人。の。述。る。口。上。に。胸。ハ。チ。ま。ね。と。秀。男。ハ。兼。て。日。傭。の。老。女。に。向。ひ。聞。く。通。り。中。谷。より。急。用。な。れ。バ。往。く。ね。ハ。ち。ま。ず。宜。し。く。苗。守。と。頼。も。る。と。老。女。に。諾。し。て。出。行。く。跡。へ。深。編。笠。に。あ。ぐ。糸。と。も。深。

子細のありげき。連立未も二人の士族水國まで知音の者  
南部寅之助富田の何某推忝せり。秀男在宿志めさる  
りと忠六めどこの老女ハ立出で。是ハくお歴々様折角  
お越の事なとどあやめく主人ハ畠守をりと聞て両六ハ  
然らハ暫時。是めてお待めかすべしと。徐々然と座を占めて  
午前八時の頃より。午右の一時の頃までも。其場を去らず  
家内の様子。貯り品まで逐一ハ手簿に留て如何に伯母公  
前今迄待ともか歸りをなれば。まご後程に忝上せん。いろ  
くか邪アと言ひ捨て。帰れハ程も主人の秀男用向と  
整へ立歸。且ハ老女ハ顔を見らるるも。今日貴君のお

畠守中二人の武家がかくくと落ものあ物語り。胸に  
釘おつ秀男が儲ハ身の上發覺せり。然し脱る計策せ  
んと。二階へよりひそむ。折々夜にたり以前の両士秀男  
公ハ飯室うと言ふ聲まひて二階より。南部主とめり  
捨て。忽ち蹴破る窓格子。家根と傳ひて大地へさひあり  
足に任せく行んとすれど。最前家根より飛ぶ折柄右の足  
に傷を受け。疵持つ足の其上にまご。一層の憂苦と抱こ  
免やせん角ゆと思ふ折。幸ひ街なる車と雇ひ。疵を押  
へて逸散に跡をまじく逃げさるるなり  
押るや浪花の里に名あり。めんどし繁と千陌の黨



と結びし一小隊の獲物と待やらひ客も車懸りの陣備へ  
武者の時再や黒の幌夜寒むと凌ぐ出立はに身にま  
くケツトウ緋威しや萌黄威しと様々に我先馳んと抽  
籤の手綱うろろ客待喘し大改本田三丁目車夫の亀  
吉云ひるろろ同じ人間みの生とをぐる車に乗るあり引  
もあり其まて靴と造るめとど同じ車をく乗る人に  
生とて見とまの富島の加賀屋に止宿のお客こそ違ふ  
お金の湯水の如く自己も車に乗せらるるがなんど結構  
を身分なり羨敷とよと寄合の喘しとちりてとて  
取る查公兼て千當田の最中かねの神速も富島加

賀屋に到り巨細か吟味ありなれば其家の主人申らふ  
貴命の客へ今朝程癸足残念至極と聞くらりも前  
文車夫の亀吉に前刺其方喘せし客へ何処へ乗せ  
ぞ明白申うせと仰に亀吉其客へ同所松島中の  
丁。舊備備前屋今の名へ小野亀次郎と申す方とて  
るの本田警察所詰一等巡査和田久吉四等巡査の  
長謙吉の両士に汗馬に鞭打つて小野が宿所へ馳来  
り。家内不殘搜索に客と思しと年輩は廿五六の士族風  
俗怪しき者と住所姓名逐一札問ありなれば僕へ西国廣  
島縣の士族大東信道なりと立流み云へど何処ゆりに

真氣の技の賤昧言語端とてへて利発の両士五分と  
も透るぬ糺問に。さし根強き曲者も。双士の威風に  
折倒され道ろく道も頭と小口と。覚悟とせしめり。答  
るふ。嗚呼天なる哉命なる哉。斯く發覚るく上る。今  
の何と包むべし。大東信道なり。この飯の名。本名。山  
口縣の舊士族。先年佐賀の江藤新平に左祖し。今般大  
阪北堀江林方にて島津君の。大金盗とし。阿曾沼秀男。  
謀ろくと思し。此場に於て頭とし。残念至極と無  
念の顔色と。召捕れと。つて捕縄流石有名の  
吾和田と長氏。勇はし。つじ形勢なり。嗚呼無道の

富貴へ浮めり。雲昨日まで。酒池肉林に錦繡の夜の食君  
君傾城の肉蒲團に。且那尽しの寢容も。今日ハそれ。あ  
引換て身に纏えり。三寸繩掌先喰ひ。る。糞縛のい  
た。さ。あ。り。り。血の泪身と知る。雨の舍り。さ。へ。天。下。下。ふ。の。卒  
屋。さ。り。外。ハ。な。り。く。引。き。よ。く。身。の。成。る。果。を。是。派。を。け  
ま。其。時。秀。男。囊。中。に。ハ。殘。金。三。千。〇。〇。三。兩。と。八。千。九。百。九。厘  
あり。其。後。同。月。三。十。日。京。都。府。へ。拘。引。さ。り。中。谷。半。七  
松。榮。に。あ。ら。く。其。外。秀。男。に。関。係。の。諸。人。不。殘。召。さ。れ。て  
お。吟。味。あり。早。竟。阿。曾。沼。秀。男。の。御。所。置。ハ。如。何。知。ら  
ざ。し。と。ぞ。正。道。奉。導。て。恩。賞。を。賜。さ。る。人。も。秀。男。の。中。に。

GANSHODO-SHOTEN  
KANDA TOKYO  
田神京東  
店書堂松巖

010190508590

己の心の置き所。慈悲弘大の朝憲に背く父兄  
 自也。不孝と尽し得難く貴重の人躰に生れ得しうへ  
 万国に秀でし日本國の民とあり。蒼生撫養の聖代に  
 其廣恩を忘却なし。汚名と残す悪人の數に入ることを悲  
 しうずや。實に怖るべし。天道あり。慎むべし。悪行  
 あり。幼稚の時より善く導き正道と守り父兄の職たり  
 又慈悲たり。國恩報ずる寸端なきん。本文ハ西京  
 新聞の巨細ありと茲にきく。筆と添る。聊の勸善  
 徳悪の一端あり。ちりちりちりちり。聊の勸善  
 西南河曾の白波大尾

天保の初めより明治十一年迄の長め法  
**繪本五月兩物語 全三冊**

島津元名の大合と奪取

**西南河曾の白波 全三冊**

阿多沼秀男が傳

大阪府守一大區九小區

平野町五丁目八番地

繪本  
 阿多沼  
**石川和助藏板**

